

オペレッタは、学年の代名詞

副校長 細井宏一

おわかれ音楽会が終了した。今、今年のオペレッタのテーマ曲「Colors」の新しい下校放送が初めて流れている。たいへん爽やかな気持ちと、ほっこりと心があたたかい感動の中で、この原稿を書いている。今年も、すばらしい音楽会であった。

本校の音楽会は、その名称に「おわかれ」とついており、メッセージ性を持たせているところに大きな特色がある。小学校で音楽会をすると、一般的には、児童鑑賞日が先で金曜日に行い、土曜日に保護者鑑賞日とすることが多い。しかし本校では、保護者鑑賞日が先で児童鑑賞日の方が後、どちらかという児童鑑賞日の方が本番である。これも「おわかれ」ということの意味があるからである。1～5年生はお世話になった6年生に感謝の気持ちをこめて音楽表現する、6年生は在校生へのメッセージを込めてオペレッタを創作し演じる。このことが、子どもたちの表現活動をより味わい深いものにしていく。今年も1年～5年生の合唱・合奏はどれもすばらしく、6年生へのメッセージがひしひしと伝わってきていた。子どもたちのいきいきと歌う姿・歌声は心に響く。6年生のオペレッタも、圧巻で、涙が思わず溢れてきた。上演後、在校生を見送るときの6年生のはじける笑顔が私はとても好きである。

オペレッタを見終わると、私が5年担任をしていたときの、ある出来事を思い出す。体育館から教室に帰ってきたとき、「すごかった」「面白かった」という声もあったが、意外な言葉が多く聞こえてきた。

「やっべえ！ すげえーやっべえ～」

言葉が丁寧でなくて申し訳ないが、これがそのままの言葉である。その意味は、なんなのか。「6年生のオペレッタがすばらしくて、感動しての『やっべえ』」なのかと思った。ところが、違った。その児童に聞いてみると、

「来年、あんなにすごいオペレッタが、自分たちに作れるかな。やっべえ～よ。」

というプレッシャーの言葉だったのだ。5年生にとっては、次は自分たちの番であるということが伝わってくる行事でもあるのである。今年の6年生も、昨年はそのような気持ちが少なからずあつたろう。であるから、上演を終えたときの6年生の達成感は大きく、はじける笑顔はとてもすばらしい。

本校のオペレッタの取組は、最初は「森の音楽会」という決められた台本で、曲も決まっていた、それを毎年行うようになっていたようだ。ところが約30年前、当時音楽指導をされていた泉先生が、2年連続で6年生の音楽担当をすることになり、そのとき「同じ台本・曲を連続でやったのではおもしろくない」ということで、オリジナルを作ったのが始まりだそうだ。最初の作品は「風船の旅」。それ以来、毎年自分たちで創作のオペレッタが続いている。泉先生は今年も2日目児童鑑賞日の日に参観にいらしてくださいました。

少し話しが変わるが、臨海学校の手伝いで卒業生が毎年何名も本校に来てくれている。そのとき、名前は思い出せてもどの代の卒業生だったのか、学年の前後関係がわからなくなることが多い。そのようなとき、

「君たちのオペレッタは、何をやった代でしたか。」

と尋ね、それが分かると「ああ、あのオペレッタの代ね」となって、昔話が盛り上がるのがよくある。オリジナルオペレッタはその代(学年)を象徴するものでもあるのだ。今年の卒業生76回生の皆さんはきっと、

「ああ、あの Colors オペレッタの代ね。」

と言われるようになるのであろう。オペレッタの成功には衣装作成など保護者の方のご協力も欠かせない。

6年生保護者の皆様、ご支援ご協力に深く感謝いたします。

全校保護者の皆様、ご参観、誠にありがとうございました。

